

「患者」主体の医療に関する情報行動 —公共図書館の位置づけに着目して—

若松 ちひろ

現在の医療は高度に細分化・専門化されているため、医療に関して素人である患者や患者の家族(以下「患者」)は、医療従事者から与えられる説明のみでは、自らの病や症状について理解することが困難である。しかし、理解が不十分であることに情報ニーズを覚える「患者」、または医療従事者から与えられた説明に対して懐疑的な「患者」は、様々な情報探索ツールを用いて自ら情報を探索することが可能になっている。

また近年、課題解決型サービスの一例として、医療情報提供サービスを行う公共図書館が見られる。しかし、公共図書館同士あるいは医学図書館とのネットワークなどの整備が不十分である傾向がある。また、医療情報の専門家ではない公共図書館の職員が、「患者」の求める的確かつ正確な情報を提供することはいまだ困難である。そこで、「患者」が公共図書館に対して持つ情報ニーズを明らかにする必要があると考えた。

以上のことを踏まえ、本研究では「患者」の情報ニーズに注目した。今回の研究は、今後の研究で、公共図書館における適切な情報提供サービスとは何かを明らかにするというより大きな目的を見据えている。「専門家が素人に提示した情報に対して、素人が情報行動をとる背景と、情報探索の中の公共図書館の位置付けには、素人のライフヒストリーが密接に関わる」が、本研究の仮説である。

研究を進めるにあたって二つの作業仮説「他者からの情報をむやみに信用するなという教育を受けた人は情報の受容度が低く積極性が高い。信用するなという教育を受けなかった人は情報の受容度が高く積極性が低い」と「学歴が高い者ほど権威に対する信頼度が高いため、受容度と積極性は正の関係である」をたてた。この仮説を検証するために、S県T市のS病院の小児科外来患者とその家族24件に協力を依頼し、情報教育に関するライフヒストリー、情報受容度、情報探索の積極性を尋ねる半構造化インタビューを行った。

インタビューの結果、ライフヒストリー関連質問では情報教育を受けたことがない、または記憶にないという回答が多かったが、教育現場以外で示唆された経験があるなどの回答も得られた。情報受容度関連項目では、健康情報の受容は娯楽の範囲にとどめ、信じない、執着しない情報受容の仕方をしているなどの回答を得た。健康情報以外では情報過多のために戸惑う声がみられた。積極性関連項目では、最も利用されていた情報探索ツールはインターネットであり、家族・知人、医療機関、書籍が続いた。情報探索の目的は、症状などについて知るだけでなく、医療機関に行くかどうかの判断に使われることが多いことが明らかになった。これらの結果を総合して、ライフヒストリーと受容度、積極性との明らかな相関は見られなかったが、「学歴が高く、さらに広い意味での情報教育を受けたものは、情報受容度に明らかな相関関係はみられないが、権威に対する信頼度と積極性は高い」ことが示唆された。

(指導教員 後藤嘉宏)